

■教育行政のポイント

“入試改革”に万能処方箋はない

菱村 幸彦

昨年12月22日、中央教育審議会は、答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」を公表した。これを踏まえて、本年1月16日、文部科学省は「高大接続改革実行プラン」を決定した。ここでその内容を解説する紙幅はないが、一つだけ「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」について取り上げたい。

偏差値序列を加速させた共通1次

入試制度改革は、万能の処方箋のない難問である。戦後、大学入学選抜のための共通テストは、たびたび改革されたが、未だに満足な処方を得ていない。これまでの経緯は、次のとおりだ。

第1は、進学適性検査（進適）。進適は、国立大学の課程を履修するに必要な知的能力を検査する集団知能検査として1949年から始まった。進適は、練習効果が顕著に出ることや学力検査との二重負担が問題となり、国立大学協会や全国高校長協会から中止の要望が出て、1955年に廃止された。

第2は、能力開発研究所テスト（能研テスト）。中教審答申「大学教育の改善について」（1963年）は、大学入学選抜が事実上ただ1回の学力筆答試験のみによって行われ、大学側に競争を緩和する努力がなく、高校以下の教育に憂うべき影響を与えていると指摘して、信頼度の高い共通的・客観的なテストの導入を提言した。

文部省（当時）は、財団法人能力開発研究所を設立して、1967年から学力テストと進学適性能力テストを実施し、大学入学選抜に利用することとした。しかし、大学側が能研テストの利用に消極的であったことから、2年で廃止となった。

第3は、大学共通第1次学力試験（共通1次）。中教審答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」（1971年）は、大

学入学選抜の弊害は、特定の大学に希望者が集中し、能力の接近した者をしいて区別するための試験（難問・奇問等）を行うことにあり、(1)高校の調査書を選抜の基礎資料とすること、(2)学校間格差を補正する方法として、広域的な共通テストを利用することを提言した。

答申に基づく共通1次は、1979年から始まり1989年までの11年間、国公立大学の入学志願者を対象として実施された。共通1次の実施により、入試問題の難問・奇問は排除されたが、偏差値による大学の序列化、偏差値輪切りの進路指導等の弊害が指摘されるようになった。

1点刻みの公平性は排すべきか

第4は、大学入学者選抜大学入試センター試験（センター試験）。臨教審第1次答申（1985年）は「偏差値偏重の受験競争の弊害を是正する」ため、共通1次に代えて、国公立を通じて各大学が自由に利用できる共通テストの創設を提言した。この提言に基づくセンター試験は、1990年から始まり今日に至っている。

今回の答申は、センター試験の問題点として、選抜性の高い大学における1点刻みによる学力検査偏重の弊害等を指摘し、センター試験に代えて、新たに「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入を提言している。

答申は、1点刻みで問う試験の点数を重視する選抜が「公平」だとする観念の桎梏を断ち切らなければならないと指摘し、試験結果を1点刻みでなく段階別に表示すること等を提言している。

しかし、スポーツでは、0.1秒刻みの公平性を追及している。1点刻みを排して、果たして選抜テストの信頼性を確保できるか。今回の改革も有効な処方箋とはなり得ないと思う。

（ひしむら・ゆきひこ＝国立教育政策研究所名誉所員）

●社会の変化に対応した校長・副校長・教頭の学校経営術 《最新刊》

校長・教頭のリーダーシップとマネジメント術

〔編集〕八尾坂修（九州大学大学院教授） 四六判・208頁／定価（本体2,000円）＋税